

社会科の授業を対人援助学の視点から③

2023年8月12日 内田一樹

はじめに

今回は先日7月20日～23日に行われた2023年度選択講座「東北と復興」の石巻市スタディツアーの報告を行う。ツアー自体も2年目ということで1泊伸ばして、各日程において自分の中でテーマを設けてストーリーをつくった。今年度のツアーの感想や学びの振り返りは夏休み明け以降の振り返りの場での様子を見守っていききたい。

1. 2023年度「東北と復興」石巻市スタディツアー報告

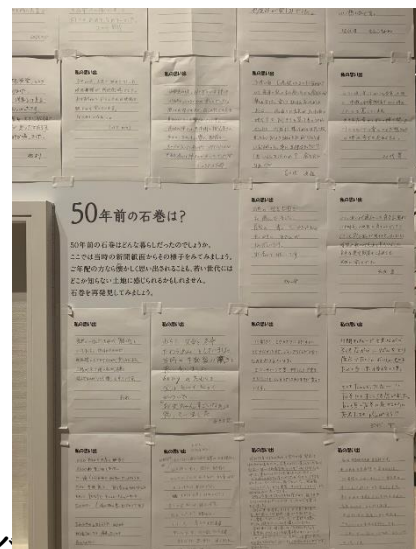
2023年7月20日(木)～23日(日)まで「東北と復興」の宮城県石巻市スタディツアーを実施した。行程表(予定)は以下の通りである。

月日	時間	場所	内容
7月20日 (木)	7時32分 東京駅発	東京駅	集合・出発 新幹線
	7時56分着、57分発 大宮(埼玉)	大宮駅(停車)	新幹線
	9時04分着 仙台駅	仙台駅	仙台駅到着
	9時25分発 仙台駅—石巻駅	仙台駅(仙石東北ライン)	仙台駅から石巻駅へ 乗り換え
	10時14分着 石巻駅	石巻駅到着	
	10時20分発 桃生交通バス合流	石巻駅前 石巻博物館へ	移動バスと合流
	10時30分着 石巻博物館	石巻博物館	トイレ休憩
	10時30分～12時00分	石巻博物館	研修、1時間
	12時10分発 石巻博物館	石巻博物館から、いしのまき 元気いちばへ	バス移動。
	12時30分～13時30分	いしのまき元気いちば	昼食 トイレ休憩
	13時30分発	雄勝へ	
	14時30分着	雄勝着	トイレ休憩・説明等
		おじま漁港・荒浜海水浴場・モ リウミアス・夕飯等(体験系の ワーク)	雄勝渚泊阿部久良さん案内
	18時30分	モリウミアスで宿泊	トイレ休憩、宿泊施設チェックイ ン
18時30分～19時30分	モリウミアスにて1日目の振 り返り		

	20時00分から		自由時間
7月21日 (金)	6時30分～7時30分ごろ	モリウミアス	朝食
	8時00分発	大川小学校へ	
	8時30分着	大川小学校	
	8時30分～9時30分 9時30分～10時30分	大川小学校・伝承館	伝承の会(佐藤敏郎さん)にしたがって案内を受ける(～9時30分まで)。 大川小学校→伝承館
	10時30分発	大川小学校	
	11時30分頃	石巻市街地へ	
	11時30分～12時30分	まきいし	昼食
	13時00分～17時30分	門脇小学校・南浜ツアー	
	18時～19時	かわべい振り返り	
	19時～20時	楓楸栞	夕飯
	20時30分着	ルートイン石巻河南インター着	
	7月22日 (土)	6時30分から8時20分ごろ	朝食
8時30分発		ホテルルートイン石巻河南インター	
9時ごろ		ルートイン発	
9時から11時		雄勝法印神楽保存の会 講演+ワークショップ	石巻市中央公民館
11時10分発		昼食会場へ	
11時30分～12時30分		仙台弁当 縁家	昼食
13時00分～17時00分		人的交流 Rera こども∞感パニー	3.11をきっかけに生まれたNPO法人の方から活動のお話を伺い、これからの活動について考える。
17時30分～18時30分		かわべい振り返り	
19時～20時		とり文	夕食
7月23日 (日)	6時30分から8時20分ごろ	朝食	
	8時30分	チェックアウト	
	8時30分～10時30分	上品の郷	
	10時48分発	石巻駅から仙台駅へ	
	11時52分着	仙台駅着	
	12時20分～13時20分	おしか	昼食
	13時30分～15時30分	せんだいメディアテーク	
	16時25分発	仙台駅から東京駅へ 新幹線	
	17時39分着	大宮駅	
	18時24分着	東京駅	

1 日目

今年度の1日目のテーマは「石巻市の伝統や文化、生業を知る」と考え、石巻市博物館や雄勝町での漁業体験を盛り込んだ。石巻市で午前中に1つプログラムを入れようとするとうとう朝が早くなってしまった。7時半に東京駅を出るということは多くの生徒が始発で家を出なくてはならなくなるので、この点については来年度以降もう少し考えていく必要があるようだ。



石巻市博物館では学芸員さん2人に対して10人程度ずつ2グループに分かれて話を伺った。石巻市の古代からの歴史や文化などを中心に話していただいた。石巻地域は古代から漁業や港町として発展をしてきた。近代には伊達藩の一部として鑄銭場等も作られ、河川と海が交わる場所として江戸と東北をつなぐ交通の要衝にもなった。博物館ではあまり東日本大震災のことをメインに取り上げているわけではなく、この辺りについても市内の他の震災遺構との役割分担をはかっているらしい。震災前からある石巻市の歴史・文化のセンターとしての役割を引き継いでいる。俯瞰的に石巻市を見ることができたが、生徒達の反応は様々であった。震災のことを学びに来たことと、歴史・文化を学ぶということがつながらないという面食らったような反応をしている生徒達もいたようだ。事前にもう少し説明が必要かもしれない。

昼食を石巻元気市場で済ませると、雄勝町へ向けてバスで移動。1時間程度かけて雄勝町へ。石巻市は2005年に、桃生町、河南町、河北町、北上町、雄勝町、牡鹿郡牡鹿町と石巻市が合併し、新しい石巻市となった。今年度はその中で雄勝町にフォーカスし、漁業体験とモリウミアスでの宿泊を1泊させてもらうこととなった。

雄勝町へついた頃には天気が崩れそうであり、夏にもかかわらず寒いと感じるほど気温が低くなっていた。「前日までは熱帯夜で本当に暑かったんですけどね」とは雄勝町の道の駅、硯上の里で合流した現地のコーディネーターの方。雄勝でのツアーの仲立ちをされており、今回の漁業体験や宿泊施設の仲立ちをお願いした。





巨大な防潮堤をくぐっていった先に船着き場と漁場があった。漁業体験では船に乗る組と陸に残る組で10名程度ずつの2組に分けて、前半後半と交代でそれぞれ漁師さん達からお話を伺った。いずれも真摯に言葉を選びつつ生徒達の質問にも答えてくださっていた。

印象的だったのは、震災前と震災以後で銀鮭の漁獲高が変わったそうだ。その理由として銀鮭は土の匂いを覚えており、海へ出た後もその匂いを頼りに生まれ育った場所へ戻ってくるそうだ。ただし防潮堤が新たに作られたことによって土の匂いが変わり、銀鮭が戻ってこられなくなり、漁獲高も減ったそう。

合わせて生徒から福島第一原発の処理水の海洋放出についてどのように考えているかの質問が出た。これについては漁師という立場が利害関係に直接関わるので、ということであまり明言できないとしつつも、再び魚の値段が下がってしまうのではないかという心配が仲間内で出ているそうだ。震災以後もこうした影響が漁業に出ているということを改めて生の言葉で聞けたように思う。しかし近年これらにも増して問題になっているのは地球温暖化の影響で漁獲高が減ってきていることである。逆に南の魚が網にかかるようになってきて、海の変化を顕著に感じているということをお伺いできた。



その後、荒浜地区へ移動して津波碑について地元の方からお話を伺った。荒浜海水浴場は12年ぶりの海開きを翌日に控えていた。津波碑の後ろの防潮堤を上って下りた先には海水浴場となる砂浜が広がっている。

お話の内容は以下の通りであった(お話ししてくださった方の語りについてかなり方言が強かったこともあり、後日コーディネーターの方が要約のデータを生徒用に送って下さった。そのデータを以下抜粋する。)

【要約】

昭和8年3月3日に発生した巨大地震(※執筆注：昭和三陸地震)により、荒浜地区は津波に襲われ地区の大半の家屋が流され、犠牲者も出た。荒浜は壊滅状態となり、隣の漁村で被害の少なかった大須地区の住民が支援に来てくれた。(大須地区は集落が高台に集中していたため被害が少なかった。これは東日本大震災時も同様で、大須地区は住宅被害が少なく食料や衣料も豊富にあったので、自衛隊などからの物資が供給されるまで

の間、他の集落や避難所に分け与えるなどした。) 荒浜の住人はこの昭和8年の震災を教訓として家屋は高い場所へ建て直した。功を奏して、東日本大震災時でも大津波で甚大な被害を受けたが、地区内での人的被害はなかった。(※荒浜在住だった雄勝病院勤務の看護師が職場にて1名犠牲となった) 石碑に刻まれた「地震があったら津波の用心」という言葉は、学校で習ったわけではなく地域住民や親から教え込まれた教訓である。

【補足】(コーディネーターの方から)

巨大防潮堤(必要以上の高さの防波堤)は海と共に暮らしてきた住民にとって、海の様子が見にくくなり、景観も損なうという理由で建設には反対だった。ある程度の津波には対応はできるかもしれないが、10メートルを超える津波が押し寄せた場合は、防潮堤を超えた津波が逆に勢いを増し、被害が更に大きくなる。(防潮堤そのものの強度にも不安が残る) 一方で、避難するための時間稼ぎにはなるという意見もあるが、地震があったら高台に逃げるとい教訓が津波に対する何よりの対策であり、他に命を守る方法はないと思います。



その後、1日目の宿泊施設であるモリウミアスへ。こちらは元々桑浜小学校という小学校であったが、2002年に廃校した。東日本大震災以後、この場所を使って新たに関東などから学びに来る場所としてモリウミアスが誕生した。雄勝町の豊かな森と海の恵みについて宿泊しながら体験的に学ぶことが出来る場所であり、本来は宿泊だけの施設ではないが、今回は特別に宿泊を認めてくださった。夕食に出される地元産の食べ物に舌鼓を打ち、1日目の振り返りを小グループに分かれて行った後にこの日のプログラムは終了した。

2日目

朝からお散歩へ。5時という早い時間にもかかわらず、2人の生徒がついてきてくれた。

前日に聞いていたのだが、地元の桑浜漁港まで徒歩で20分ぐらいらしい。ここは防潮堤がなくそのまま港に入ることができる。

漁師さん達は朝の1時、2時ぐらいから作業をされていて、午前中には漁を終えるらしい。午前1時は執筆者からすると深夜、もしくははまだ寝る前ぐらいの感覚である。

坂道を下っていくと、美しい漁港の風景が見えてきた。どこまでも青い海と青い空。日本一美しい漁村がそこにはあった。両側には切り立った崖で、その地形を生かしてつくられた漁港であった。





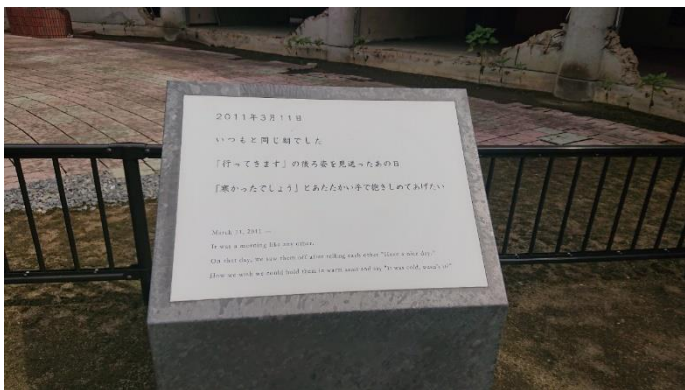
漁港を歩いていると一人のおばさまが声をかけてきてくださった。聞くと、石巻市のもっと内陸の方から車でここまで漁に来られているようだ。午前1時から車を飛ばして来る道中には鹿が出てくることもしょっちゅう。朝からウニの収穫に漁に出て、もうすでにある程度一段落してこれからもう一度漁に出ようというところだったそう。かなり親しげにこちら側のことも尋ねてくださった。関東の方から学校の講座で学びに来ていること、モリウミアスへ泊まっていることを伝える。パートナーの漁師さんにも紹介して下さる。「竿を持ってきてねえのか!?何のために来たんだよ」という言葉に笑いながら、すみません次回来的时候は、と答える。モリウミアスの職員の方の家もここにあるんだ、と教えて下さる。そこで昨夜、最初にモリウミアスの職員の方から聞いた話が思い出される。「この地域でも、かつては外から来る人たちに対して少し警戒しているところもありましたが、モリウミアスを作るとともに地域の復興を目指していく中で、この施設を利用する外から来る人たちに対しても寛容になってきて、今はもう受け入れて下さっています。」職員の方のことを話す漁師さん達を通して震災以後にできたモリウミアスが地域の中でどのような活動をされてきたのか伝わる気がした。

その後モリウミアスへ戻って朝食を済ませると、施設を後にして2日目の活動をスタートした。2日目のテーマは「震災遺構をまわって東日本大震災の被災の大きさを考える・感じる」というものである。昨日同様に雄勝を案内して下さったコーディネーターの方が大川小学校に行く途中でぜひ立ち寄って欲しいと、雄勝病院へ案内して下さいました。2011年当時、彼もここで被災をされたそうだ。「自分の知り合いもここで亡くなった」と語り始めるコーディネーターさん。これまではあまりメディア等でも取り上げられなかったが最近メディアでも少しずつ取り上げられるようになってきて、当時この病院で何が起こったのかを多くの人に知って欲しいということ。そしてその雄勝のコーディネーターの方の語りで印象的だったのは、「ここは大川小学校とは違って、患者の遺族の人たちもみんな職員の人たちに感謝しているんですよ。最後まで一緒にいてくれて」という言葉だった。色々なことを感じたが、この雄勝病院は本来のツアーの行程には入っていなかった。1日目だけの予定が2日目の早朝にわざわざ駆けつけて、この雄勝病院に案内をされたコーディネーターの方思いを考える。高校生達を前にして、ここで起こったことを知って欲しいと語られた言葉はずしんと落ちていった。昨年もあったが、高校生達を前にして時々現地の方が何か突き動かされるように語られる場面に出会う。ツアーの予定を組むようになったからこそ、そうした場面があることにも気づくようになってきた。



コーディネーターの方とはここでお別れだったが、「大川小学校は佐藤敏郎先生の案内を受けるんですよ。実は自分は敏郎先生の最初の教え子だったんですよ(笑)」と最後に教えて下さった。

予定通りに8時半頃に大川小学校に到着する。大川小学校では大川伝承の会の佐藤俊朗さんから1時間程度案内を受ける。



佐藤さんの案内を受けるのは個人的には2度目である。1度目は昨年下見に来た際に、ちょうど月に1度の伝承の会の案内の日と重なっていたので、その参加者の一人としてであった。昨年も伝承の会の方に案内していただいたが今年はまた違う語り口で、生徒達の受け止め方も異なっていた。

佐藤さんの言葉で印象に残ったものは2つある。1つめは裏山に上ったときに言われた言葉。「ここに山があれば助かったはずですよ。でも子ども達は助からなかったんだ。山は魔法の絨毯じゃない。災害の時、山が助けてくれるわけではない。命を助けるのは山に上るという行動なんだ」ハッとした。もう1つは、佐藤さんの当時その場にいた先生達への語りである。当時、児童達が逃げた道を一緒に佐藤さんを先頭に歩いて行く。以下がその語りの内容をまとめたものである。

ここまで来た時に津波が来たんですね。その最後の瞬間、児童達やその場にいた先生達はどうかだったかなって思うんですよ。でも僕は先生達の最後の行動は想像ができますよ。きっと大きな津波の前に両手を広げて子ども達を守ろうと立ち塞がったはずですよ。抗えないような大きな力を前にしていても、最後の瞬間まで子ども達のことを思っていたはずですよ。でもね、その瞬間どれだけ子ども達を助けようとしても、もう遅すぎたんだ。その意味も考えないといけない。考えるべきはもっと前の、平時にどこに逃げるかを考えておかなければならなかった。そうじゃないと子ども達の命は守れなかったんだ。大川小学校は特別な学校じゃない。あの「大川小学校」と言われます。あのとき、避難するか避難しないかの選択をせまられた。避難して助かった学校はそれで良かったけれど、避難しなかったけれど助かった学校もあった、その中で大川小学校は避難しなかったから助からなかった学校になった。でもこの避難しなかった学校の違いはどこにあるのか？避難しなかったけれどもたまたま津波が来なくて助かった学校もあったはずですよ。大川小学校とそれらの学校の違いはどこにあるのか？大川小学校は決して特別な学校ではない。特殊な事例ではない。本当にこんなことを繰り返さないためには、避難しなかったけど助かった学校、避難しなかったけどたまたま津波が来なかった学校、これらもなくしていかなければいけないんだ。もう大川小学校の校舎の中には入れなくなったが実は未だに教室の棚の子ども達のネームシールははげていない。僕にはその理由が分かる。新年度自分のクラスに来る子ども

がどんな子なんだろうって想像しながら、先生達は想いをこめてシールを貼る。だから震災や津波を経て、どれだけ時間がたっててもまだはげていないんですよ。

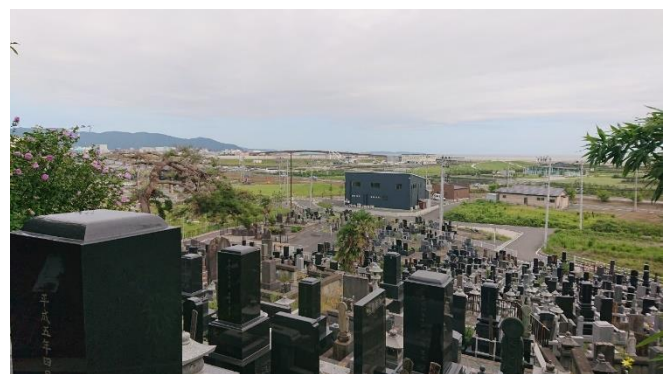
以上のような内容であった。佐藤さんご自身が大川小学校でお子さんを亡くされた遺族であると同時に学校の先生であったからこそその言葉であるように感じた。不思議と執筆者にはその説明がすっと入った。それは執筆者自身が先生という仕事をしているからかもしれない。これまで大川小学校での先生達がどのような思いを抱いていたのかを想像することから少し逃げていたかもしれないと感じた。もちろん先生の思いも児童の思いも、一人の旅行者には到底理解し得ないものだと思うし、分かるとは言い切っただけいけないものとも思う。それでも考える、想像するということが実際に教師として高校生達の前に立つ自分にはしなければならないのではないか、と感じた。先生たちは児童たちを大切に思っていた、しかしそれでも命を守れなかった。その理由、意味を震災後にずっと問い続けてこられた佐藤さんの説明は自分の中で新しい視点をもたらしてくれたようだった。「山は助けてくれない。命を守るのは山に上るといふ行動なんだ」という言葉は昨日に聞いた「防潮堤は助けてくれない、高台に逃げるといふことが大事だ」といふ考え方に通じるように感じた。

1時間ほどの案内の最後に佐藤さんご自身の娘さん含めて、大川小学校の遺族の兄弟姉妹たちがどのように感じていたのかについて、「東北ココから」といふ番組で今夜あるといふことを教えて下さった。遺族の大人ではなくて、当時遺族の子ども達はどう感じていたのか語り始めたので見て欲しい、とのことだった。当時のメディアの報道のされ方や切り取られ方で遺族の子ども達も傷ついたりもしたが、今回の番組は慎重に作ってくれた、といふことだった。案内を受けた後、高校生達は大川小学校で1時間ほど自由に見て回る時間とした。

大川小学校でのプログラムを終えて、今度は石巻市街地、門脇地区を目指す。昼食後、門脇小学校と南浜地区をツアーで案内いただく。

門脇小学校では3.11メモリアルネットワークの阿部仁さんの案内を受ける。門脇小学校の卒業生で、この地区に住んでおられるようだ。震災遺構である門脇小学校の入り口で待ち合わせをしたが、そこにはもう一人女性がいらした。彼女は当時門脇小学校で校長をされていた鈴木さんであった。たまたま近くに来て迎えを待つ間、執筆者たちに当時の小学校の様子を語って下さった。





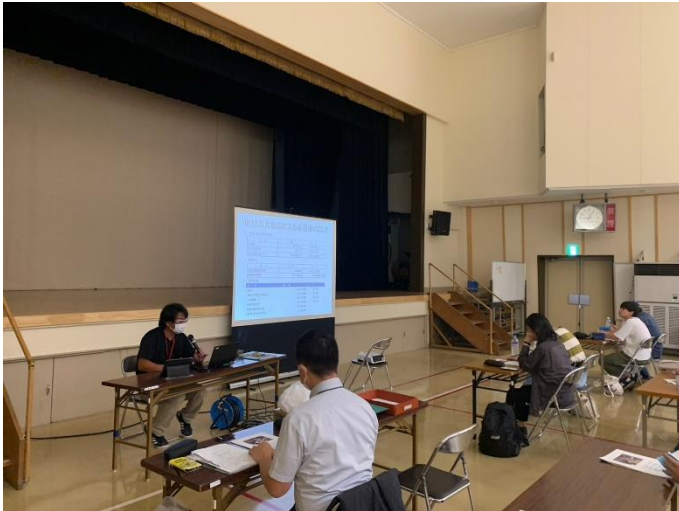
門脇小学校と小学校からの避難経路の追体験、MEET 門脇、がんばろう！石巻看板と回る。今年度はこのツアーの行程を当初の予定よりも少し短くした。生徒の中で軽い熱中症のような症状や疲れが出て休みたいという人が出たからである。朝早く雄勝から移動してきたことや前日との寒暖差もかなりあって、全体的に疲労がたまっている様子であった。雄勝から移動してきて午前中大川小学校、午後門脇小学校というプログラムはかなりの強行軍であったかもしれないと後悔した。

しかし、ツアー後のかわまち交流センター(通称、かわべい。以下、かわべい)での交流はかなり一人一人感じたことが多く、それを全体で聞きたいという雰囲気があった。当初 60 分程度を予定していたが、90 分以上かかっていたように感じる。疲れもにじみ出ながら、それでも全員の言葉を聞こうとする高校生達の姿。それぞれが震災遺構をめぐって感じたことがあった。その後貸し切りにしたお店で夕食を。お店のテレビで「東北ココから」を映してもらった。「語り始めた大川小の子どもたち」というタイトルであり、当時大川小学校の遺族といわれた子どもたちがどのように感じていたのかを中心に、大人になった当時の子ども達が当時の思いを語っていくという内容であった。

2 日目は奇跡のような偶然が多く重なった一日であった。高校生達を連れてこなければ執筆者自身知ることができなかったこと、出会うことができなかった場面が多くあった。

3日目

この日のテーマは「復興の今を知ろう」というものであった。午前中に雄勝法印神楽保存会の方のお話をお伺いし、午後は現地の NPO 団体との交流会を企画していた。移動も昨日ほど長くないということもあり、朝は少しゆっくり出る。



石巻市教育委員会の主導で会が開かれる。雄勝法印神楽という重要無形民俗文化財の成り立ちから、東日本大震災での被災での道具の流失。その後、震災で大変な中で神楽を舞うことに意味があるのかと葛藤もありながらも舞った結果、地域の人たちの元気を取り戻すことにつながったというお話。震災と津波、災害が失わせたものと、それでも続いていく伝統の強さのようなものを感じることができた。後半には実際に神楽で使われる道具を作るという時間もあった。

午後は場所を石巻市水産総合振興センターに移し、NPO 団体の方達との交流会である。昼食を弁当で済ませて、午後の準備を進める。講演をお願いした NPO 団体は、移動支援団体 Rera さんとフリースクールやプレイパークを運営するこども∞感パニーさんであった。Rera さんは昨年度から継続してお願いしており、今回の交流会についても楽しみにしてくださっていた。昨年度参加したメンバー以外にも誘って連れてきた、と笑顔でおっしゃってくださる。こども∞感パニーさんは初めてであったが、講演と交流会について快諾してくださった。そのほかに中間支援団体いしのまき NPO センターの方も来てくださっており、つながることができた。

午後の交流会については、学校紹介、司会進行は高校生達にまかせる。動画もまじえた自校紹介はとても良かったし、高校生が主体で会を運営していくことが現地の NPO の方々にとっては新鮮だった様子だった。





こども∞感パニーさんからのお話は、子どもの持つ可能性について示唆に富むものであった。震災後、大人達が目の前の課題等を前に、ギスギスとした雰囲気になっていたようだ。お互いに口論になることも。しかし子ども達のために空き地を使ってプレイパークを作ったり、自分達で自作の映画館を作ったりとしていくうちに、その周りの大人達も子ども達を自然と手伝って、笑顔になったと。子ども達の笑顔で大人も笑顔になることができた、力をもらうことができた、という話であった。そして震災以後プレイパークやフリースクールの運営を行っている。石巻市の不登校の子ども達の数やそれに対してある支援の現状を通して「震災課題から社会課題へ」という言葉が印象的であった。

Reraさんはこども∞感パニーさんとは違って主に高齢者の方達の足となって支援をされている。利用者の方々の声などを紹介しつつ、一方で行政やタクシー等の民間の会社との狭間で移動支援を行う難しさについても吐露されていた。これは石巻市だけの問題では無く、今後多くの地方都市が抱える問題、社会課題であることには変わりはないように思った。昨年度のお話の続きのような部分もあり、昨年度から継続して選択している生徒の中にはそのことについて考える生徒もいた。

それぞれ1時間ほどの講演、及び質疑応答を終えた後に小グループに分かれて、NPO団体の現地の方々も各グループに入って一緒に議論をして考える。今回の問いは事前に各団体の講演者の方と打ち合わせをした結果、「NPO団体と思いを持っている若い人達とつながる、入ってきてもらうためにはどうしたらよいか？」というものであった。各団体ともに新しくNPO団体を手伝ってくれる人の不足や入ってきてすぐ辞めてしまうという現状があるという悩みがあり、埼玉の高校生達とこの問いについて考えてみたいということだった。

執筆者自身、ファシリテーターとして一つのグループに入ったが驚いたのは、かなり自分自身の経験や周囲の状況も振り返りながら語る生徒達がいたことだ。不登校の経験や不登校の兄弟姉妹がいたりして、こども∞感パニーのような団体が近くにあって欲しいというものや自らのおじいちゃん・おばあちゃんの交通の不便さを考えたときにReraの活動のありがたさを思うというものであった。まさに「震災課題から社会課題へ」という社会課題として高校生達の目の前にも横たわっている問題であるように感じた。つながるという方法については多くのグループでSNSという意見があがっていたが、一方でそのSNSへどうアクセスするか、そうした現場に飛び込むための勇気をどうやったら持てるかということも話題にあがっていた。友人と一緒に誘い合わせて参加する、ツアーを行う等である。

高校生達は NPO 団体の方達とかなり意気投合した様子で、交流会終了後も外でそれぞれに話を続けていた。こうしたつながりが、高校生達にとってまた次に石巻市に来たいという原動力につながると嬉しい。特に高校3年生は来年から大学や専門学校、もしくは就職をするのでそれぞれに個人で来ることができると思う。ぜひ来てここからまた新しい輪が広がることを願っている。

かわべいで振り返りもそれぞれに充実したものであったが、その後ホテルに戻って東京大学との高大連携で来てもらっている大学生2人と教員での定例(今年度は1日の終わりに実施した)の振り返りと打ち合わせをしているときに次のような言葉があった。「NPOの方の話を聞くのは分かるのですが、石巻市の、という部分よりも社会課題という部分が大きくて、埼玉のNPOの方のお話を伺うのとどう違うのか(同じではないか)、ということも少し思っていました」遠慮がちにであったが、このような内容の言葉であった。だからこそ自分の問題に引きつけられる、という考え方を執筆者はしていたが、確かに…と思う部分もある。今後もNPOの方達との交流の時間はもっていきたいが、その際に何を語ってもらうようお願いするか、震災課題と社会課題とをどう結びつけていくか、まだまだ考えないといけないところもあるな、と感じた。

4日目

最終日であり、今日のテーマは「未来について考える」というものであった。朝から移動し仙台でお昼ご飯を食べた後に、せんだいメディアテークの3月11日をわすれないためにセンター(通称わすれん!)の活動について、職員の方からお話を伺う。

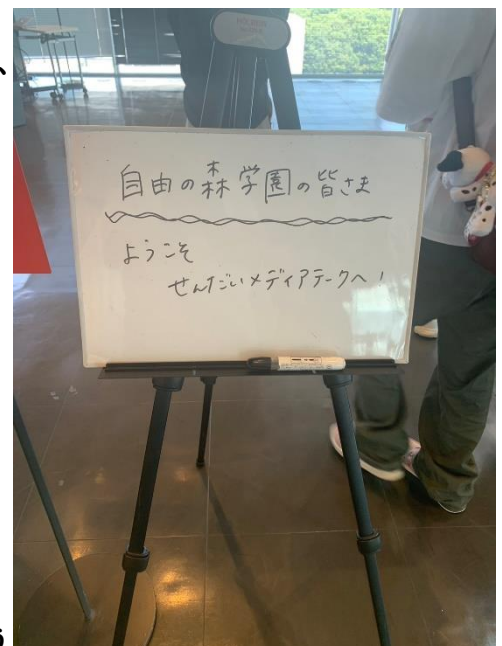
朝から石巻市の上品の郷という道の駅でお土産を購入する。昨年と同じバスの運転手さんだったため、この頃には生徒の中には運転手さんとすっかり仲良くなった人もいた。

その後仙台に移動してせんだいメディアテークへ。

メディアテークでは館内の案内に合わせて、記録を残すことの意味、アーカイブ化していく理由について説明してもらう。記録を残すことが必ずしも正しいということをお願いするのではなく、今はまだ振り返ることが難しい人でも、いずれ振り返りたいと思った時に何もなかったら、振り返ることができない。だからこそ様々な角度からの記録を残しておく、という説明はとても印象に残った。

「ひとことといえばわすれん!は、東日本大震災という歴史的な出来事を、個人の立場と視点から記録して、公的に共有し継承していくアーカイブ活動です。一般的なアーカイブでは、記録の〈収集と保存〉に力を入れます。それは震災アーカイブでも同様ですが、わすれん!では、記録そのものをつくる活動に重点のひとつが置かれていることがユニークな特徴です。何を記録すべきかという指示がまったくなく

いうことは、「何を・どのように・誰が・発信し、記録するか」という問題に、参加者一人ひとりが向きあうことを意味します。その結果、わすれん!に寄せられた記録には、被災状況の一次資料だけではなく、一人ひとりの視点からあらためて語られ、振りかえられた、さまざまな想いや考えが記されました。出来上がった記録は、個々人の視点を色濃く帯びており、震災の記録としてもユニークだと言えますが、それに加えて、多数の人たちがひとつのテーマについて、記録と作品の境界があいまいになっていくような何かを集合的につくっていく「表現をめぐる試み」としても、ユニークなものになっているのです。」¹



¹ 佐藤知久,甲斐賢治,北野央『コミュニティ・アーカイブをつくろう!—せんだいメディアテーク』,晶文社,2018年

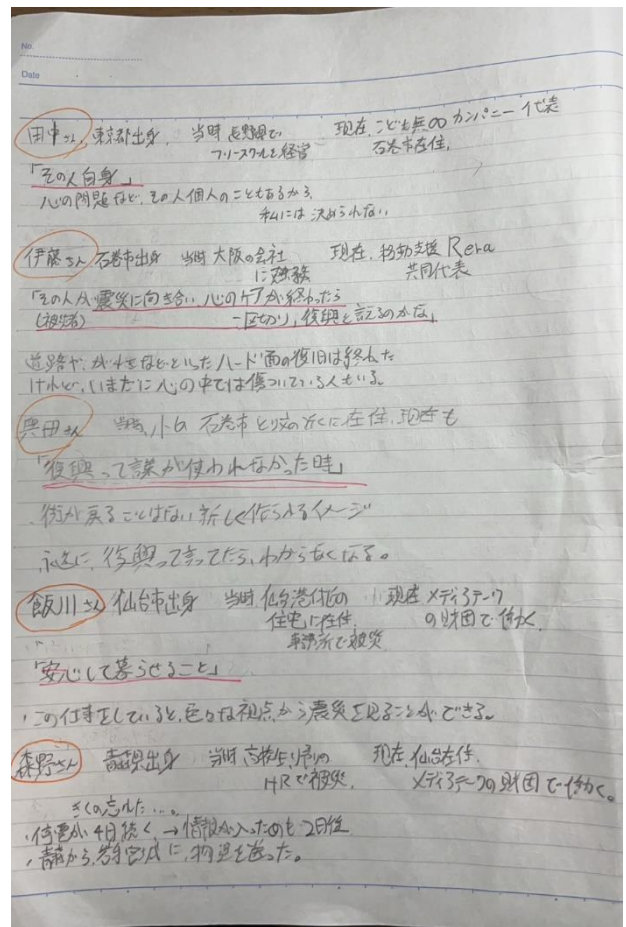
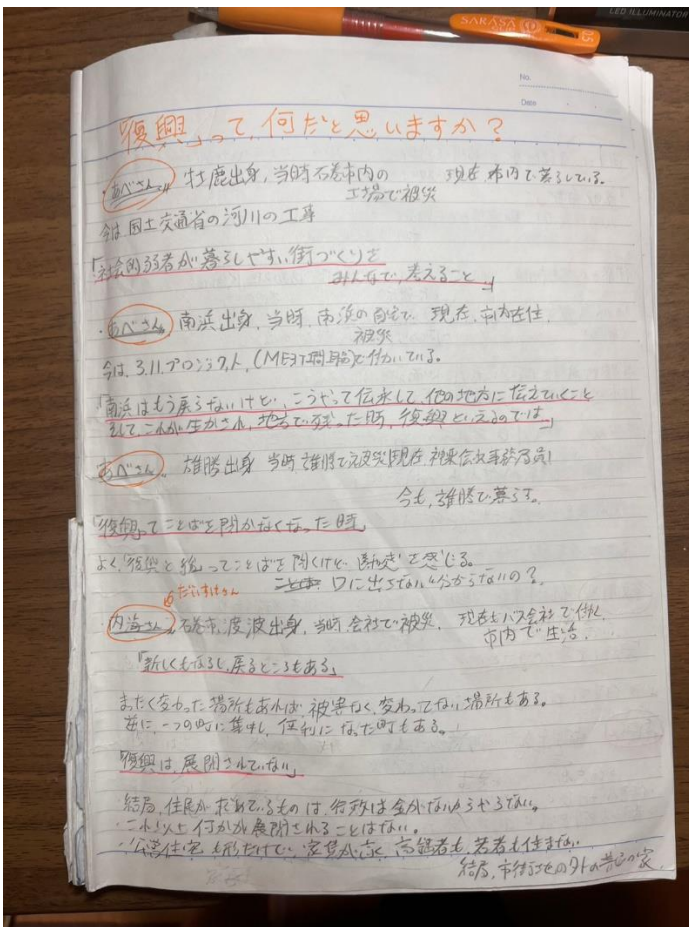
一緒に記録を作っていく活動に参加しませんか、と職員の方から声をかけられたのだが、どのように生徒達は受け止めているのだろうか。この辺りは夏休みが明けて感想を聞く場面で聞いてみたいと思っている。当日のことについてはメディアテークの方も記事にして紹介して下さっていた。

(<https://recorder311.smt.jp/blog/64482/>)

午後のメディアテークでのプログラムを終えて、仙台から東京へと新幹線で向かう。最後の解散の際には生徒達は疲れてもいたが、どこかやりきった表情もしていた。3泊4日と昨年よりも1泊伸ばし、訪れる先も昨年よりはかなり増やした。情報過多になりすぎていないかという気持ちもある。執筆者は何を高校生達に学んで欲しいのか、高校生達は何を学びたいのか。試行錯誤しながらの2年目のスタディツアーは終わり、まだまだ課題もたくさん残ったな、という実感である。そして来年のツアーはこうしたいと考えることができるのは、継続して関わることを保障されているからだな、と思う。

石巻市、及び仙台でお世話になった方々にはこの場を借りて改めてお礼を言いたい。

2. ある生徒のノートから



ツアーの中盤以降、出会う人たちと必ず終わった後に質問に行っている生徒の姿に気がついた。その生徒Aは、昨年このツアーを受講していた高校3年生の生徒だった。そこで何を話していたのかを聞いてみると、「復興って何だと思いますか?」と質問しているのだという。ツアーの中で出会う人たちはある程度高校生達との交流について引き受けて下さっている方々だから大丈夫か、と思い、また面白い取り組みだなと思って、「帰ったらノートのデータを送って欲しい」と頼んだところ、このデータを送ってくれた。上記の写真はその一部である。

Aは確かに昨年1年この講座を選択して学ぶ中で「復興って何だろう?」と問いを深めていたな、と思い出す。誰にとって、あるいは何がどうなれば「復興」なのか問い続けていた。Aはどちらかといえば人見知りなところもあり、あまり積極的に初対面の人に話しに行くタイプではなかった。そのため、今回現地で行く先々で

積極的に人と関わっている姿を見て成長を感じたと同時に、そのノートを見せてもらってあまりの現地の人たちの語りの豊かさに驚いた。高校生が質問することに対してそれぞれに真摯に向き合って答えをくださっていた。地域のコミュニティがなくなってしまったことや景色が変わってしまったことへの思いの吐露、防潮堤にまつわるお金の流れ(関東の大企業が受注していて地元でお金が回っていないこと)など、ノートを見ていると現地で関わった方々それぞれの「今」に対する声が聞こえてくるようだった。それは全体の講演や関わりの中だけでは聞くことができない情報でもあった。

Aは昨年から学んできたことや疑問に思ってきたことをそれぞれの場面できちんと出しており、だからこそそれに現地の方達も答えて下さったのだろう。Aが自ら得たこれらの声や知見を今後どう生かしていくのかも見守っていきたいと思っている。何よりも現地の人たちと仲良くなって名刺などをもらっている姿に、このような生徒達がこれからまた石巻市や東北と関わっていくのだろうと。この講座をきっかけにしてまた新しいことが生まれるのではないかと希望を感じている。